

学習知を生活知に

—— 高校における新聞活用教育の実践 ——

長野県辰野高等学校 有賀久雄

はじめに

今21世紀を前にして、教育あるいは「学校」というシステムが根底から問いただされている。曰く「学級崩壊」いわく「学力低下」そして「学びからの逃避」……云々。考えてみれば20世紀末とりわけ冷戦終結後、IT革命を軸として、世界が社会が産業革命以来の激変にさらされている中で、近代社会を支え、近代人を効率よく作り出してきた学校教育がその存在価値を問い直されているのは当然のことといえよう。生徒を含め世の多くの人々が、今の教育は変わらなければならないと考えている中で、一番変わっていないのは、実は我々教師なのかもしれない。黒板を背にし、チョーク1本で教科書を中心とした教科カリキュラムを生徒に教え込む、といった知識注入型の、明治以来の従来の学力観や教えの発想のままでよいのか。学校とは、教師が教える所ではなく、何より学習者が学ぶ場なのだということを、「学び」から「逃避」し、「学力」を「低下」させた子どもたちは訴えているのではないだろうか。子どもが学習の主体となって自ら学びとる授業。受験とかテストのためではなく、受験があってもなくても「楽しかったね、あの授業」と振り返ることのできる授業、そんな授業を創り出していかなければ。2003年からの「総合的な学習」の時間の導入。それは日本の教育が新たに変わりうる、日本にとって本当に最後のチャンスかもしれない……。

NIE (Newspaper in Education) —— 教育に新聞を —— という新聞活用教育はまさに「総合的な学習」の主役になりうるものだ。情報メディアからいかに必要な情報を学びとるかという情報リテラシー（活用能力）を育てる、いわば学びの方法を学ぶ教育だからだ。そこまで考えなくても、従来の教科書中心の教科学習が新聞教材を取り入れることで、多少なりとも生き生きしてくる。「教科書は古墳にして著作は墓場であるが、学会は戦場である。」教科書を用いずに、旧制諏訪中の生徒に生きた地理学を教えた三沢勝衛の言葉であるが、学会とまではいかなくとも、授業の折に触れて新聞にある今の情報、生のものを示して、教科書で学んだことが実際の社会ではこんなふうに応用されている。実社会のこんなところと関連があると知らせることで、生徒は初めて授業で学んだことが世の中で役立つんだ、自分に関係があるんだとわかるのだと思う。それは子どもの中で学校と世間が出会う場面であり、いわば「学習知」が「生活知」になる瞬間とでもいうべきだろうか。

1 実践の概要

単なる一実践報告にしては言葉が過ぎたかも知れない。要はNIEという教育方法は総合的な学習という名のもとにおいて、教科を自主編成する中で最も効果を発揮するものとするのであるが、実践1年目ということでもあり、また私自身社会科の中で最も自主編成が難しいと考える歴史を担当するということもあり、まずは従来の教科中心、講義中心の授業形態の中で、新聞教材がどのような役割を果たせるかを、できるだけ多くの教科で、多くの先生に追究して頂くということで、半年間授業の中で取り組んでもらった。

2 新聞の置き場所と整理の方法

ホームルーム教室棟の2階の空き教室を新聞閲覧室（NIEコーナー）として、9月より半年間7紙を置き、（朝日、毎日（後半産経）、読売、日経、中日、信毎、長野日報）職員や生徒がいつでも新聞を読める環境を作った。生徒は閲覧室に近い2年生が一番多く利用し、常連の生徒の中から自然発生的にNIE同好会ができた。同好会発足後は、会員が進んで朝新聞を取りに行き、並べ、古いものを整理してくれるようになった。

3 実践内容（授業での取り組み）

A 地理①（1学年）

生徒が2～3人のグループを作り、世界の国々について発表する形態の授業に合わせて、取り上げられた国の現在の様子を最新の新聞記事で紹介する。（モンゴル（マンホールの底で暮らす子供達）（'00.1.3）ロシア（大統領選）コソボ（地雷についての黒柳徹子さんのレポート）（いずれも朝日の記事）

B 地理②（3学年 選択地理）

「人種と民族」の単元で、ユーゴや東ティモールなどの民族紛争を学んだ。9月10日「東ティモール独立派圧勝、残留派民兵暴行」のニュースを各新聞がどのように扱っているか、NIEの部屋に生徒を連れて行き、各新聞から東ティモール関連の記事を読み取らせ、抜書きをさせ、3～4人に発表をさせた。生徒は、初めての授業形式だったので興味を示し、こちらも講座人数が25人と少なかったため、全員に目が行き届いた。また、いろいろ話してみると、生徒が普段あまり新聞を読んでいないことがわかった。

C 日本史①（3年 選択日本史（通史））

4月最初の授業で、下伊那郡高森町で出土した富本銭についての記事（'99.3.24 信毎）を取り上げ、生徒の興味を引き出して、1年間の日本史学習の導入とした。

D 家庭一般（2学年）

「家族」を学ぶ単元で、直近の新聞から、家庭欄を中心に家族に関する記事を探させ、スクラップ（切り抜き）をさせた。（2月15日）時期的に「介護」「介護保険」に関する記事が多く、それをもとに現在の介護をめぐる状況を話し合った。

E 国語Ⅱ（古典 2学年）

古典文法を学ぶにあたって、文法とはどのようなものであるか、ということを実例を例にとり説明した。（'99.6.8 朝日「天声人語」）

F 商業（総合実践 2学年）

昨年度に引き続き、毎日、新聞記事のスクラップをすることを課題とした。狙いは社会事象への関心を持たせ、それへの感想や自分の意見を持たせることにある。3学年になっても続けさせ、就職試験の一般常識や大学等の小論文入試に備える力をつけさせたいと考えている。

G 日本史②（3学年 必修（近現代史））

毎年、年度初めにアンケートをとってみると、「歴史は暗記科目だから苦手（嫌い）だ。」「昔のことを勉強しても今の自分とは全く関係がない。」という生徒が圧倒的に多い。そんな、中学までの学習で苦手意識を持っている生徒たちに「いや、そうではない。歴史上のできごとが積み重なって現在の日本社会があるのであり、歴史（過去）を学ぶことで現在の社会の特質を深く理解することができる。現在、そして未来の日本社会を考えるにあたって、その一番参考になるのが日本史、特に近現代史の歩みをふりかえることだ」ということを、1年間の授業を通じて伝えることを最大の目標としている。そしてその目標を実現するのに新聞記事を使うことは役立つ。「歴史とは過去と現在との対話である。」（ソールズベリー）過去（教科書で学ぶ歴史的事実）と現在（今の日本社会で起こっていること）をつなげる橋渡し役を、新聞記事がはたしてくれる。具体的には2つの方法。1つは当時の古い記事を取り上げて、歴史的事象が当時どのように報道されていたのか、あるいは当時の人々がその事件をどうとらえていたのかを知る。いわば過去（当時）の視点で歴史を見る。もう1つは今の新聞記事を取り上げ、現在から過去を見ることで歴史と今の社会とのつながりや、今の社会の問題点が見えてくる。すなわち現在の視点で歴史を見る方法である。（年間学習スケジュールは資料を参照のこと）

① 当時（過去）の新聞記事から学ぶ

ア 日露戦争開戦（1904年2月11日東京朝日新聞）（出典「朝日新聞で読む20世紀」『知恵蔵1999』別冊付録）

日露開戦を報じる日の朝刊を見せ、どんなことが書いてあるかを調べさせる。まず明治37年2月11日という日付に注目。政府が前日2月10日に宣戦布告をすることで、国民はこの日すなわち紀元節に開戦を知らされることになり、国民の士気の高揚と愛国心の鼓舞のために、政府が用意周到な演出をしたことがわかる。また、既に主戦論に転じていた当時の新聞が、まず冒頭に「君が代」の歌詞を載せ、「日の丸」と海軍旗が交差した下に描かれた日本軍艦の挿絵とともに2月8日以来の戦況を伝え、明治政府の意向に沿った報道をしていることが読みとれる。

イ 大逆事件の判決下る（1911年1月19日 東京朝日）（出典同じ）

「判決は下れり。有史以来の大事件として天下の心胆を寒からしめたる幸徳伝次郎以

下廿六名の判決は下れり。二名を除くの外悉く死刑。」という表現から、天皇制絶対であった明治時代において、いかにこの事件が重大なものとしてとらえられていたかを読み取ることができる。またこの記事の中で、戦前の横書きの日本語が右から左に書かれていることを知り、驚いた生徒もいた。

ウ 南京入城式（南京事件）（1937年12月18日東京朝日）（『朝日新聞に見る日本の歩み』）
「萬歳の嵐・けふ南京入城式の壯観、先頭は松井最高指揮官」の写真を見る。昭和12年12月日中戦争において日本軍は、当時の中国の首都南京を占領した。その前後にいわゆる「南京大虐殺」があり、国際的に非難を浴びていたにもかかわらず、当時日本国内ではその実態が殆ど報道されず（検閲、報道統制）南京陥落を花電車や提灯行列を出してお祭り騒ぎで祝っていた。なお、当時の新聞を注意して読むと「けふぞ南京城完全占領 東西南の各城門より皇軍大部隊勇躍突入 包囲下に大殲滅戦展開」（1937.12.14 東京日日）と、虐殺をほのめかす表現があるにもかかわらず、国内で殆ど問題にならなかったことから、戦時下の国民の感じ方、考え方を見て取ることもできよう。

エ 太平洋戦争開戦（1941年12月9日 朝日夕刊）（『朝日新聞に見る日本の歩み』）
開戦の詔書には、自存自衛のため、東亜（アジア）の平和のためという理由が書かれていること。真珠湾と並行してマレー半島にも奇襲上陸したことなどが読み取れる。

② 今（最近の）新聞記事を使って、歴史を考える

ア 「税込50兆円割れ確実（国の98年度）」（'99.6.2 朝日）

明治政府が行った地租改正（1873地租改正条例）を学ぶにあたって、その導入として、その日の朝刊の記事を紹介した。いつの時代でも為政者は国家収入について苦心しており、明治新政府も富国強兵の近代化政策を推進するにあたって、いかに安定した、しかも江戸時代の年貢を下回らないような貢租を確保するか苦心し、そのために地租改正事業を行ったという、地租改正の目的に気づかせていくための資料とした。まさにその日の朝刊の記事ということで（プリントにする時間の余裕がなく）、教壇で新聞を掲げ、手で示し、記事を読みながら授業を進めたが、殆どの生徒が注目し本題に入っていくことができた。

イ 「東ティモールに戒厳令」（'99.9.8 信毎）

第1次世界大戦後の国際協調の時代に叫ばれた「民族自決」の原則を今日にあてはめると、インドネシアからの東ティモールの独立運動に見ることができるとして、授業当日の朝刊を資料プリントにして配布した。

ウ 「ルポ世紀を歩く 米騒動」（'98.7.1 朝日）

1918（大正7）年 富山の主婦たちが米価高騰に反対して起こした騒ぎが全国に波及し、ついに時の内閣を退陣に追い込んだ米騒動。今から80年前の事件の発端となった地を訪ね、「米だけに頼って生きた」時代の空気を伝えるルポで、生徒の興味を引

いたのは、地元の滑川市の中学校では現在でも運動会で「米騒動」という名前の、女子だけが参加し米俵に見たてた砂袋や、タイヤ、太縄を奪い合う種目があるという部分だった。往時の漁村主婦の生活エネルギーが偲ばれる話であるし、地元の人々が「米騒動」発祥の地であることを誇りに思い、その歴史を今に伝える話であると感じることができた。

エ 「台湾大地震死者1546人」('99.9.22 朝日)

「ルポ世紀を歩く 関東大震災」('99.9.1 朝日)

大正12年の関東大震災を学ぶ導入として、近々に起きた台湾大地震の話題から入り、それや阪神大震災と比較し、関東大震災の被害者数の甚大さが主として火災による焼死によるものであることを理解させるために用いた。「ルポ」の陸軍被服廠跡の惨劇（避難者4万人中3万8000人が焼死）は生々しく、生徒は食い入るように読んでいた。また地震の際に火災を発生させないことの重要性を感じ取ってくれたように思う。

オ 「西村防衛次官更迭へ」('99.10.20 信毎夕刊)

授業が太平洋戦争に入ろうとする頃、西村次官の「核武装」発言のニュースが飛び込んできた。既に日中戦争の学習で南京大虐殺や従軍慰安婦を学んだ生徒たちにとって、「核とは『抑止力』ですよ。強姦しても何も罰せられんのやったら、おれらみんな強姦魔になってるやん。」という西村氏の発言。さらに、戦争とはその国の男性をすべて排除して女性をすべて強姦するか、されるかということ、という品のない持論に憤り、まずこのような考え方でしか国際関係をとらえることができない人物が、ときの防衛（軍事）政策のNo.2になっていることをどう考えるか、また平和な今の時代にこのような発言をする男性が、日中戦争の戦場に当時赴いたとしたら、どんな行動をとるだろうかと、歴史の今と昔を行きつ戻りつしながら、生徒とともにいろいろなことを考えさせられた事件（できごと）であった。

カ 「思い残して祖国に別れ、残留孤児20人」('99.11.16 信毎夕刊)

十五年戦争の学習を終えようとする11月。今年も肉親捜しのため中国残留孤児が来日、ニュースとなる。集団形式の訪日調査としては、今年が最後になる中国残留孤児がなぜ生まれたのかと問いを投げかけ、満州事変、満州国建国、満蒙開拓団（義勇軍）の入植、ソ連の参戦と言う歴史的流れを復習し、改めて現在の日々の出来事や現象の発端、原因が過去にあることを再確認した。

キ 「食料自給率40%割る」('99.12.25信毎)

1960年代の高度成長時代の学習で、工業生産が大幅に伸びる一方、農業人口が激減し、そのことが過疎・過密の問題だけでなく、食糧自給率の低下をもたらしたその傾向は今日まで続き現在では39%まで低下していること、今後この率を高めていくことが21Cの日本にとって大切な課題であることを学ばせる。

ク 「『戦後』の風化か、危機管理強化か」('99.12.25 朝日)

最後から3番目の授業で「今年1999年とはどんな年だったか」を考えた際の資料。

衆議院で2/3の勢力を占める自公政権によってガイドライン関連法などの重要法案が次々と通った今年という年を戦後史、あるいは日本の近代史の流れの中でどう位置付けて考えたらよいか。2つの異なる見方に接する中で、いずれにしても大きな転換点となる年だったことを確認してほしかったが、生徒には、やや難解だったかもしれない。

ケ 「選択の年 —— 憲法、安保、システム改革、そして政権 —— 」(2000.1.4 朝日)
最後から2番目の授業で、今年2000年はどういう年になるか、さらに21Cへの展望を考えてもらおうとした。国内的には衆議院解散・総選挙、憲法調査会、外交的にはロシアとの平和条約締結、北朝鮮との国交正常化、沖縄サミットと米軍基地の縮小、さらに先進国最悪の赤字国債の解消などの問題を考えていかねばならないことを知る。

4 生徒の反応と今後の課題

① NIE同好会の発足

新聞閲覧室(NIEコーナー)に職員に交じってよく顔を出す生徒が集まって、自然発生的に同好会ができた。(12月)商業科の男子ばかりの2年生たちである。年度内のところは、放課後集まって新聞を読み、意見交換や面白い記事の紹介をする。また各自新聞とテーマを決めて、スクラップ・ブックを作るという活動にとどまった。が、彼らが3年生になった新年度には新聞研究を通じて、投書をしたり(壁)新聞の発行など、積極的に自分達の意見を発信していくような同好会活動になればよいと考えているところである。

② 生徒の感想(日本史の最後の授業の時間に書いてもらったものの中から)

「日本史を勉強して、私は「今の日本」について考えることができたと思います。」

「日本史や他の社会科の勉強をして、ニュースとかを見て少しでも考えるようになった。考えることは大切だ。」

「日本の近現代史を勉強して……新聞を読んだりして社会のことをもっと勉強して行くべきだと思った。」

「これからの日本のことも学んだので、これからも新聞などを見るなりして、現在の日本のことを勉強していきたいと思います。」

「昔を学ぶことなど学ぼうと思えばいくらでも学べる。しかし歴史を学んでそれを使おうと思わなければ、意味のないことだと教えられたのもためになった。」

「これから日本が、全世界に対して、または地球全体に対して何をしなければならぬかという事が以前にも増して理解できたと思う。」

「戦前のような社会情勢にはなってほしくないと思います。2度と戦争は起きてほしくない。これからも私は日本史の勉強を続けていきたいと思います。」

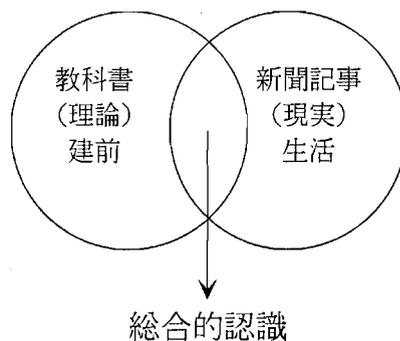
「自分達には関係ないのではなくて、世界全体を平和にするために頑張らなくてはと思った。」

「日本史を学んでいくうちに『今の日本があるのはどうしてなのか』『豊かになったのは、なぜなのか?』考えるようになりました。卒業したら、この豊かで平和な世

界にどっぷりつかっているのではなく、真の平和を目指す為にも勉強を積みたいです。」

③ 実践者の感想

日本史（近現代史）の授業についていえば、資料の年間学習スケジュールに見るように、1年でペリーの来航から1999年までを学びきるということと、アジア・太平洋戦争など、なるべく映像を見せて考えさせたい（ビジュアル時代に育った生徒たちは視聴覚教材に驚くほど良く反応し、深い考察を見せた。）ということは何よりも主眼に置いていたので、新聞教材を使ったのは総時間数の中でさほど多くはなかった。が前述の感想のように、新聞教材を用いることで現在から歴史を見つめ、歴史から現在を考えた生徒が思いのほか大勢いるのに正直驚かされた。「これからも勉強を続けていきたい。」「世界の平和のために何かをしたい。」こんなにも生徒は真剣になってくれたのか。後生畏るべし。そんな彼らに僕は未来を託したいと思う。まとめになるかわからないが、従来の、通常の講義型の授業で、新聞記事を教材として使うことの意義としては次の図の如く、教科書的知識を総合的な認識に高めてくれるということになるだろうか。



④ 今後の課題

来年度への課題としては、せっかくできたNIE同好会の面々に、より積極的な活動をしてもらうということと、さらに多くの先生方による新聞を使った授業をお願いするという。個人的には、総合的な学習における効果的な新聞の使い方を探る（現代社会）のと、新聞各社の記事の「比べ読み」を精力的にやってみたいということである。

—— 授業というものも、それが本当にうまくいったときには、子供と教師とが同じ質の、同じ高さの感動を共通にするものなのです。（田代三良） ——

資料



1904年(明治37年)2月11日*



1999年度日本史(近現代史)4単位

長野高校 有賀 久雄

4	1 自己紹介	31 ①鹿鳴館時代, (堂々日本史45分)	61 ①②太平洋戦争⑤⑥インパール作戦 (50分)
	2 はじめに(日本史学習を始めるにあたり)	32 教育の国家主義化	62 " ⑥⑦太平洋戦争後編(終戦下)(50分)
	3 学校周辺歴史散策(オリエンテリング)	33 ①大隈重信, (知ってる?)50分)	63 " ⑦⑧沖戦戦, (沖縄戦場記録)(60分)
	4 オリエンテリングの答えあわせ	34 日清戦争	64 " ⑧⑨原爆投下(0分)加筆, (60分)
	5 ペリー来航の世界史的背景(④)ヤンガ日本史)	35 三國干渉と帝国主義	65 " ⑨⑩サダコ・原爆と20C, (75分)
	6 開国と幕府の対立	36 日英同盟と開戦論	66 " ⑩⑪手紙の中の太平洋戦争(前), (45分)
	7 ⑩⑪ペリー来航の新記録, (堂々日本史45分)	37 非戦論と日露戦争	67 " ⑪⑫ " (後), (45分)
10	8 条約と開国後貿易	38 韓国併合	68 15年戦争を学んで感じたことと考えたこと(感想文)1冊
③	9 安政の大獄と桜田門外の変	39 大逆事件	69 占領と日本の民主化
	10 幕末の流れ① 高杉晋作	40 桂園時代と大正政変	70 経済の民主化(財閥解体と農地改革)
	11 ④⑤四国連合艦隊下関砲撃事件(堂々日本史45分)	41 オ1次大戦と2次大戦	71 教育の民主化
	12 幕末の流れ② 坂本龍馬	42 ベルサイユ条約とワシントン体制	72 戦後の世相と政党の復活
	13 大政奉還から戊辰戦争まで	43 米騒動と大正デモクラシー	73 日本国憲法の制定
	14 ④⑤大政奉還 VS 王政復古 (堂々日本史45分)	44 政党内閣と社会運動	74 占領政策の転換(経済再建と労働運動)
	15 新政府発足と天皇権威の劇出	45 普通選挙法と治安維持法	75 朝鮮戦争と逆コース
	16 版籍奉還と廃藩置県	46 関東大震災	76 日本の独立と安保条約
	17 四民平等と文明開化	47 金融恐慌	77 55年体制と安保闘争
10	18 ④⑤武士の廃業 (堂々日本史45分)	48 昭和恐慌と満州事変の背景	78 ①戦後史「史後」未だる昭和史(1945-60) (50分)
②	19 祝日と天皇制	49 満州事変と国連脱退	79 高度経済成長 その光と陰(1960年代前半)
	20 地租改正	50 二・二六事件	80 ベトナム戦争と沖縄返還(1960年代後半) 1冊
	21 学制と殖産興業	51 日中戦争	81 1970年代(石油ショック)
	22 領土確定(台湾出兵・琉球処分)	52 南京大虐殺①	82 1980年代(保守回帰)
	23 岩倉使節団(明治6年の政変)不平士族の反乱	53 " ②と戦時体制	83 1990年代(冷戦終結と55年体制の崩壊)
	24 ④⑤西南戦争(西郷しよたのゆけ) (堂々日本史45分)	54 朝鮮皇民化政策と新体制運動	84 1999年とはどんな年だったか
	25 自由民権運動	55 日本の南方進出(1940年)	85 2000年、そして21Cへの展望
9	26 明治14年の政変	56 日米交渉と開戦(1941年)	86 日本の近現代史を学んで(感想意見)
	27 松方財政と激化事件	57 ①太平洋戦争①概論(開戦から敗戦下)	
②	28 自由民権運動の衰退と憲法制定へ	58 " ②①太平洋戦争前編(琉球・ミッドウェイ海戦)	
	29 明治憲法と初期議会	59 " ③④ " (生徒出陣打)	
	30 条約改正	60 " ④⑤マリヤナ沖海戦(太平洋戦争)	